

思い出すこと・思い残すこと

八王子市都市政策研究会議副座長 原島 一

市の職員ではなくなる日が迫ってくるのにつれ、色々なことが思い返される。

まずは、失業率が過去最高水準といわれる今の経済状況から振り返ってみれば、「38年という長い期間を擁護されてきたことに感謝しなければならない」と素直に思う。既に退職された先輩たちや、まだまだ長い道のりを歩んでいく後輩たちの指導や協力、提案、時には不満の声などがあったからこそ奮起したり、自信を無くしたりしながらいくつもの山を越え、総じて言えば楽しくやってくることができたのである。今更ながらではあるが、多くの皆様に心から「ありがとうございました」と申し上げたい。



都市政策研究会議の成果報告会で
挨拶をする筆者（平成19年6月1日）

S氏の背中に学びながら

そうした多くの先輩たちの中でも、私の役所人生の目標となり大きな影響を与えてくれたS氏という先輩がいる。S氏は仕事に対して非常に厳しい姿勢を持ち、自分の領域はもちろん、すべての分野の業務に精通していながらも常に納得いくまで勉強している人で、その姿勢は退職するまで変わることはなかった。だからといって仕事オンリーというわけではなく、車や旅行、音楽鑑賞などといった趣味を持ち、楽しむときには思い切り楽しむ人だった。そして、職員を人一倍大事にし、真剣に話を聞き、何でも相談に乗り一緒に悩んでくれる人でもあった。私も、当時ではまだ珍しかった海外旅行をするのに20日間も休暇を取ったことがあるが、その時にも喜んで応援してくれ、仕事や恋愛などの相談にも快く乗ってもらったことを覚えている。またS氏は、たとえ合理的であっても職員のやる気を削ぐようなことには反対する姿勢を強く持ち、「どんなに苦しくとも、職員の給与引き下げはすべきでない。職員のやる気を失う方が、市にとっての損失は大きい」と理事者に主張していたのをよく覚えている。私は怠け者だから、S氏のように勉強してきたわけではないが、短時間でポイントを掴むことと、職員を大切にすることだけには努めてきたつもりだ。その評価はきっと後輩諸氏がしていることと思うが。

思い出す懐かしき職場の数々

思い出多い八王子市役所の中で、私も多くの職場で様々な業務に携わってきた。他の人たちと少し違うのは、今では存在しない職場に何回か籍を置いてきたことだ。

1回目は「庁舎対策本部」。これは当時、本町（今のいちょうホール）にあった本庁舎を、現在の元本郷町に移転新築するための臨時組織だった。「台町案」、「大横町案」という2つの建設候補地が廃案となった直後の配属だったので、失敗は許されない状況にあったのを覚えている。

2 回目は「企画部渉外課」。今の都市計画室の前身で、当時の公団・公社・東京都を相手に多摩ニュータウン、八王子ニュータウンの協議窓口を担当した。由木東事務所の建設を担当したのもその時であり、毎日のように現場へ出ていたのを楽しく思い出す。

そして3 回目は「行財政改革推進室」。黒須市長の公約実現のために新設された組織で、今の行政経営部の前身に当たる。何をどうしたら良いか分からずに、数か月間ひたすら先進事例を読み漁り、ヒントを探していたように記憶している。

こうした今は無い職場を含めて8 回の発令を受け、様々な新しい経験を積ませてもらったが、振り返って強烈に蘇ってくる職場は2 か所である。

1 つは先述した「庁舎対策本部」。この職場に配属されたことで、図面の読み方をはじめ、設計金額の積算の仕方や契約手続なども覚えた。また、技術職と初めての同居をしたことで当初はギクシャクしていたものの、お互いの知識を吸収し合い、それが新しい信頼関係につながるという成果を生んだ。財政状況が良いとはいえない状況下での新庁舎建設であったため、「防衛施設庁からの補助金確保」が実現のための条件であり、当時六本木にあった設計事務所と防衛施設庁には日参していたが、そのとき大いに役立ったのが技術職から得た知識であった。そして、議会内に特別委員会が設置され、十分すぎるほどの議論をいただきながら昭和58 年10 月、老朽・狭隘化し4 か所に分散していた庁舎が総合庁舎として浅川沿いに完成をみたのである。



昭和56 年、浅川沿いでは、現在の市役所本庁舎建設が進められていた

しかし、完成してすぐにマスコミが取り上げたのが「西の倉敷、東の八王子」といった豪華庁舎批判であった。その豪華(?) 庁舎も今では狭隘化し、会議室不足に泣いている。完成から25 年以上が経った今、空調、給排水等の設備が老朽化し、改修工事に着手しているのを見ると、自分の年齢を再認識せざるを得ない。この庁舎に関して言い残しておきたいのは、正面玄関に向かって右側にある「定礎板」の裏に、定礎箱を埋め込んであることだ。中には当時の様々な資料や貨幣などが完全密封してあるので、何かの節目に開けてもらえれば、と思う。

激動の5 年間で得たもの

2 つ目は、「教育委員会庶務課(今の教育総務課)」で過ごした5 年間である。課長時代の全てをこの職場で過ごしたことになる。私にとって一番辛く激動の5 年間だったが、同時に最も充実した期間でもあった。市長部局と行政委員会の権限の違いにいつも注意していなければミスを起こしかねないため、それまで過ごしてきた感覚とのズレに正直当初は戸惑っていた。

着任早々、火災事故の発生やマスコミに大きく取り上げられたいくつかの事件への対応などに追われ、職員に対する処分も行わざるを得なかった。同時に学校配置の市職員や教職員との協議に日程の多くを費やす日が続き、その中でも最も体力を使ったのが小学校給食の調理業務を民間委託していくための協議であった。毎晩のように夜遅くまで(時には明け方まで)交渉が続き、歓送迎会の最中に呼び出され挨拶の途中で退席するなど、正に体力勝負であり、おかげで部長が3 人も交代する事態となった。2 年かけて7 校を民間委託化したが、当時の団体側の職員にも負担と迷惑をかけたものと思っている。この職場では、26 年に1 度回ってくる「東京都市教育長会」



市役所旧庁舎の外観

の会長市にちょうどあたることとなり、今は亡き元教育長の田中博氏とほぼ毎日行動を共にする1年を過ごしたが、同時に自分も担当課長会の会長に就任したことで、リーダーシップが取れるように成長させてもらったことを、多忙ではあったが感謝している。



本庁舎正面玄関脇の定礎板

政策審議室と都市政策研究会議に期待すること

2か所と限定しておきながら勝手であるが、最後の職場である政策審議室に期待する点についても一言触れておきたい。今後地方分権が具体的に進展していくなかで、自主・自立した市政運営が求められてくるのは当然であるが、こうした元で力を発揮するのが「都市政策研究会議」の存在である。これまでは正直に言って余り存在感を主張できずにいた。当面の政策に具体的に反映されてこなかったためだが、これからの分権に対応していくための「地域経営」や「都市間連携」などは既に研究報告済みであり、ここで取りまとめた「公文書管理のあり方」も近々に実施に移されるべき時代に即した課題であり、大いにこれらの活用を図るべきである。また、新総合計画を策定する時期が迫ってきているが、この面でも政策審議室と都市政策研究会議が連携することにより、大きな力を発揮することを期待している。そのための布石がここで調査している「八王子市の地域分析調査」である。地方分権時代の政策審議室と「都市政策研究会議」とが市政運営の両輪となって『はちおうじ号』を牽引していくことを期待する。そのためには、政策審議室の職員が兼務ではなく、専任として「都市政策研究会議」事務局に配置されることが必要であり、早急にその実現をめざしてもらいたいと願っている。

1つ上の立場で仕事を考える

38年という長い道のりで、常に心がけてきたことが2つある。

1つ目は、「退職すれば一市民、だから市民の言うことに耳を傾ける」ということであり、どのような人であっても誠意を持って話を聞いてきた。これからはこうした話を聞いてもらいたい市民が確実に増えてくると思っている。

2つ目は、「1つ上の立場で仕事を考える」ということ。ヒラの職員のときは主任、主任のときは係長、係長のときは課長の立場で、という具合である。自分がその立場にあったらどう判断をするだろう、どう発言するだろうと常に頭の中でイメージしてきた。誰でも他人の判断や発言を評価するだろうが、評価ではなくその立場にあったら自分はどうか答えるか、頭の中で発言してみることによって、他人に自分の考えを伝えることの難しさを感じてきたのである。たった2つのことだが、常に自分に言い聞かせてきたことである。

さて、増大を続ける社会保障費に比して市税収入が大幅に減少する中、地方自治体はどこも苦しい市政運営を強いられている。現在の経済状況がここ数年で回復する保証はどこにもない。これまでは法人税の減収の影響が大きかったかも知れないが、過去最高水準の失業率と合わせて国民の所得が落ち込んでいることから、今後は個人市民税の減収が大きく上積みされてくることになる。「基金」で対応できる自治体は恵まれているが、それとて2、3年で底をついてしまうだろう。こうした時代に市政運営を担っていくこととなる皆さんのご苦勞を察しながらも、英知を結集して次代の八王子を切り拓いていただくよう期待している。

(はらしま はじめ・八王子市総合政策部長)